

幻の古代道路を追って

池田 誠一

■【9】島田の遺跡…鳴海丘陵のふもとへ■

1 気になる「島田」

音聞山の麓を越えると天白川です。天白川の低地は、古い時代は「あゆち瀧」と呼ばれた広い瀧になっていました。下流の南区、緑区の辺りはまだ海だったと考えられ、その上流に干瀧地帯が広がっていました。

ここまで辿ってきたルートが川を渡る地域は「島田」です。古くは島が点在したところとされます。少し上流の植田の小字に西浦という地名があり、ここまで海だったという説も

あるのです。天白川は、その流域が中世は大きな窯業の産地でした(図1)。このため多くの土砂が流出して、天白川天井川化を加速しました。従って古代までさかのぼると河床はもっと低かったとも考えられるのです。

島田は、その天白川の自然堤防だったのでしょう。そこには古代のいくつかの故事があります。奥には鳴海の丘陵が広がっていました。そしてその丘陵の麓には、古代の駅家の遺跡と推定される所があるのです。今回は、前回に引き続き迂回ルートを、八事丘陵から天白川の低地を渡って鳴海丘陵のふもとの島田を訪ねます。



図1 名古屋東南部の中世窯跡。太線为天白川

2 島田というところ

(1)天白川

前回辿った迂回ルートは二つに別れていました。一つ目の直線指向の道は、昭和高校を横切って島田橋に向かっていました。二つ目の山沿いの道は高校の北側を音聞山の裾を通過して植田に向っています。

植田は、その山裾に古代寺院の瓦を焼いたという窯跡や古い寺院の跡があり、古代道路が通過した可能性

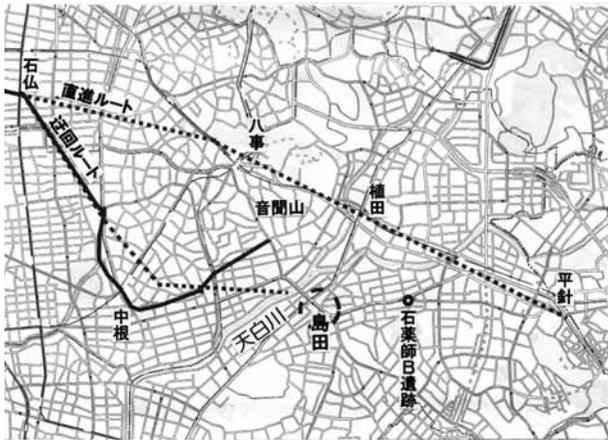


図2 これまで辿ってきた古代道路ルートと島田

が無いわけではありません。前々回まで辿ってきた直進ルートは石仏を越えてまっすぐ今の八事に出て、そこからこの植田を通ることになるのです(図2)。しかし迂回ルートの山沿いに進む道は、このまま行くと東海道の方向から大きく外れてしまいます。この辺りで、北に音聞山を眺めつつ、天白川を渡って対岸の鳴海丘陵に取り付かないといけません。ここからは、迂回ルートも一つに絞って天白川を渡ることにはしたいと思います。

(2) 島田の故事

天白川の低地の自然堤防上に出来た島田には、古代の二つの故事が伝えられています。その一つは島田臣の話です。古代も古い時代、まだ尾張国が「国司」で治められていない時代に「県(あがた)」という、各地の豪族で治められていた地域の単位がありました。その一つが「島田県」です。9世紀につくられた新撰姓氏録にはその中で、尾張国島田県は成務天皇の御世に悪神を平定して臣(おみ)の位をもらい「島田臣」になったとしています。しかし時代を経て、この付近の県は熱田の尾張氏に統合され、尾張の国司が治める時代になっていったと考えられています。

いま一つの話は、平安時代の歌謡、催馬楽の一つに次のような歌があることです。

桜人 その舟溜め 島つ田に 十町
作れる 見て帰りこんや そよや…

この歌の中の「桜」、「島つ田」を、少し下流にある桜田とここ島田の地名とみて、この地域の歌だとしているのです(文献①)。この歌

は、源氏物語にも登場し、光源氏が口ずさんでいるような有名な歌でした。

これらの二つに故事を安易にこの地域と結びつけることはできないかもしれませんが。しかしその他にも、島田には平安時代の大盗賊、熊坂長範の因縁をもつ地藏寺があり、中世にはなりますが室町幕府の管領斯波氏系の島田城が築かれています。これらは何れも街道との係わりが考えられるものなのです。

(3) 古代駅家の跡？

島田の少し東、鳴海丘陵のふもとの天白公園の北に、奈良から平安時代の中頃までの陶器がたくさん散布していた遺跡があります。石薬師B遺跡と名付けられたこの遺跡は、散布している大量の平安時代陶器の中に緑釉陶器が含まれていたため、古代の公的な施設の跡ではないかと推定されています。

『尾張志』では、島田村の項に、「此厩之内という地名は上古駅家のありけむ旧地にやあらむ…」と、地名の「厩(うまや)」からいうと古代の道路の駅家だったのではないかとし、現地の広さもそれに当たるとしているのです。

昭和57年、この地を発見、調査した三渡俊一郎氏(その後名古屋考古学会会長)は、この遺跡からは平安時代後期に大量に流通した山茶碗が出土しないことに注目しました。出土物が奈良から平安中期という古代幹線道路が維持されていた時期に当てはまることから、ここは山田郡の両村駅に比定できると考えたのです。島田は、古渡と推定した新溝駅の次の駅家の候補地として、名古屋の古代道路を考える上での重要な地点になりました。

3 紀行 天白川を渡る

… 八事から島田を越えて …

それでは、八事丘陵の裾から天白川の低地を渡って鳴海丘陵のふもとへと歩を進めて見ましょう。

〈天白川を渡る〉

地下鉄の八事駅から、バスで前回の終了地点の音聞山停に向かいます。バスを降り、信



音聞山バス停付近から南へまっすぐつづく旧道



島田城址



島田橋付近の天白川

号から南に2本目を左に曲ると、すぐ右にまっすぐに南に伸びる道があります。これが旧道です。そのまま坂を下って進むと天白川の堤防に突き当たります。少し左に迂回して右に坂を上ると新島田橋です。古い橋はその下流にありました。今は高い堤防が出来て流路が安定していますが、古い時代は、大雨ともなれば周辺の地域を巻き込んで流れていたのでしょう。

橋を渡って振り返ると音聞山が見えます。左側は天白区役所です。少し進み、信号を越えた所で右一本目を左に、古い街道(平針街道)に入ります。すぐの所で、少しややこしいですが、島田城址に寄ってみます。角を右に曲ります。次をまた右に曲って、すぐの道



天白区役所から望む音聞山



熊坂長範伝説の毛替地蔵のある地蔵寺

を左に行くと左側に城址があります。中に入ると小さな祠があるだけです。中世には鎌倉街道を押える拠点として、管領斯波氏の系列の牧氏が守った城でした。

街道に戻り東に進むとすぐ幹線道路に出ます。右の信号に迂回して向こう側に見える地蔵寺に行きます。地蔵寺には有名な毛替地蔵があります。源義経に斬られたという伝説の大盗賊、熊坂長範が街道で盗んだ馬をこの地蔵に祈って毛の色を替えたという話です。東海北陸地方に多く伝わる盗賊ですが、一時この付近も拠点にしたのでしょうか。

〈島田を越えて〉

地蔵寺から少し戻り、信号を東に向かうまっすぐな道に入ります。この道は、旧道ではありませんが、平針に向けてまっすぐ続いている道です。その道を進むと、新道と交差する



J Aの東にある旧村役場跡(左)と旧神明社跡(右)の碑。天白村の中心だった

古代駅家跡という推定もある石薬師B遺跡の梅林



平針へとつづく、気になるまっすぐな道



手前のJAの向こう側は、昔は神明社があり太白村役場があった所です。まっすぐな道は、新道を越えてからしばらくはその中に消えます。

次の溝口の信号を右に一本入った向こう側に梅林があります。ここが「石薬師B遺跡」で、尾張志や三渡氏によって古代駅家と推定された所です。地盤が高かったのを、道路部分だけ区画整理で削られたのでしょうか。露出している斜面の出土物が気になります。

さて、遺跡を東に進み、突き当って左に新道に迂回します。次の道を右に曲るとすぐ、まっすぐの道の続きがあり、こちらはバス通りになっています。この道は明治の地籍図では見つからない道ですが、直線志向の古代道路を探していると、どうしても気になってしまう直線道です。道は東に平針方向に伸びていますが、今回は、途中の原交差点で終わりです。左に坂を緩やかに下れば、5、600円で地下鉄原駅に着きます。

4

山田郡の郡域

尾張国には、中世の末まで山田郡という郡がありました。位置は名古屋の東北から東に、そして東南へと名古屋の東を取り巻くような郡でした。ところが、どういふわけかこの郡が中世の末に廃止さ

れ、北部は春日郡(春日井郡の前身)に、南部は愛知郡に分割されたのです。そしてその郡域も分からなくなってしまいました。

この郡域が古代道路で問題になるのは、10世紀頃つくられた『和名抄』に、山田郡の中に「駅家郷」(駅家のある郷)が記載されているからです。このため、両村駅は山田郡にあった可能性が高いのです。山田郡域の北側は昔の庄内川の河道でほぼ固まっており、その西側は西区まで延びています。東側も美濃・三河の国境で意見は一致していますが、問題は南とその西側で意見が大きく分かれているのです。南側は、大きく分ければ

- ① 天白川とするもの、
- ② 緑区や豊明市近くまで含むもの、
- ③ 国境の境川と知多郡境付近までのもの、

など多くの意見があります(図3)。今回紹介した島田の石薬師B遺跡は、①の場合では山田郡ではないことになるのです。山田郡の郡域問題は名古屋の古代道路ルートにも影響を与えそうです。

〈主な参考文献〉

- ①『天白村誌』(1966、天白村誌刊行会)
- ②同編集委員会『新修名古屋市史2』(1998、名古屋市)
- ②三渡俊一郎『昭和・天白区の考古遺跡』(1989、市教育委員会)

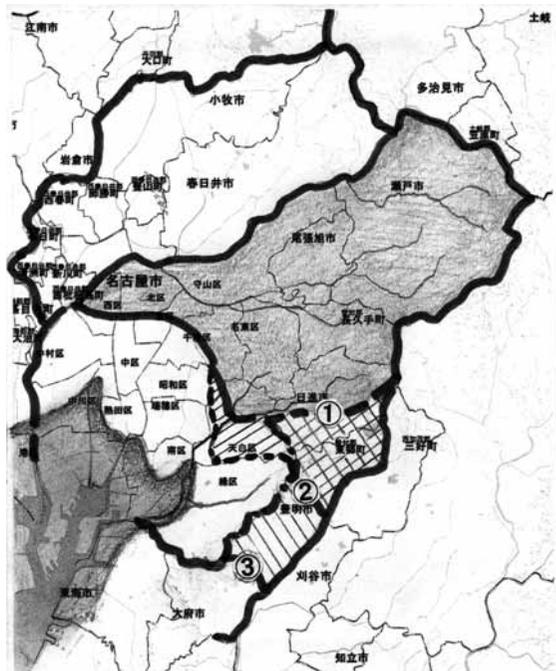


図3 議論がつづけられている旧山田郡の郡域(中央)。①、②、③と3つくらい意見がある